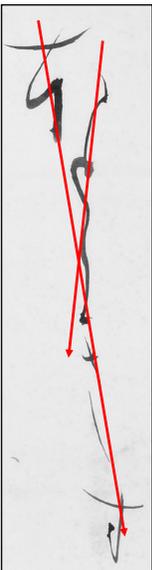
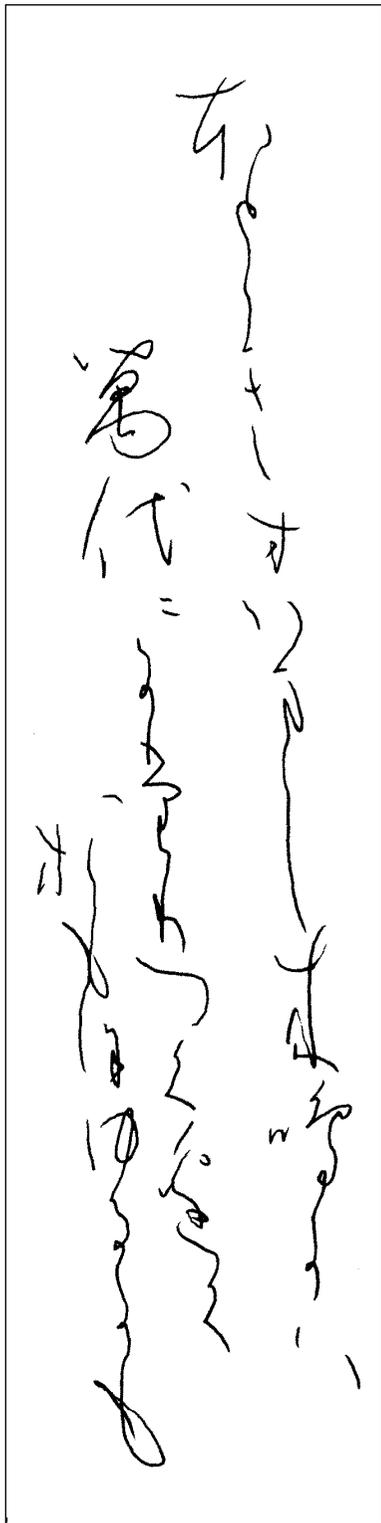


ほととぎす今し来鳴かば萬代に語り継ぐべく思ほゆるかも



この紙の幅の真ん中寄り上部から書き始めている。初めから右への行の流れを意識した字配りだと考えられる。ただ、一行目

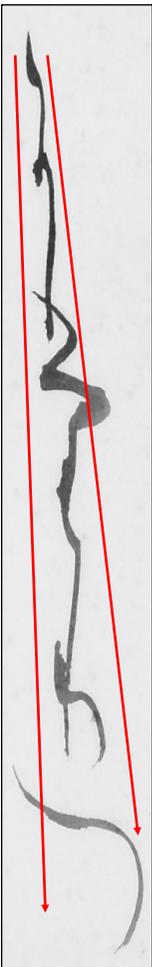
が長いのでこの辺りから書き始めなければ自然な流れが表現しにくくなってしまうともいえる。「本」と「と」の位置関係をよく観察して、行の流れが自然に始められるよう気を付けたところだ。



行の流れがとても美しい部分だ。「し」を長くしている事もあるが、すっきりとして伸びやかな線が清らかな流れを生んでいる。「い」から「万」、さらに「し」のそれぞれの画の傾きに気をつけて美しい流れを表現してほしい部分だ。

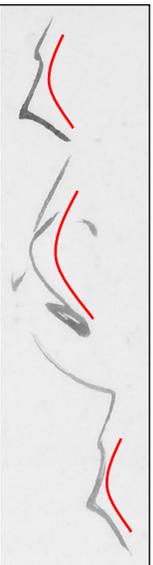


筆のワレと掠れをうまく使って味わい深い線質で表現している。四角形に近い字形で、敢えて流れを感じさせないしつかりとした線質で書いている。特に「代」については、一つ一つの画を違う線質で表現しているような面白味があり、字形と共に注目したい。



唯一の墨の継ぎの部分

分だ。ここでは幅の狭い細身の字が少しずつつ広がっているように表現して興味深い。それもただ単に広くして行っているのではなく、「堂」の太い横画が節になっている竹のように生き生きとしたリズムカルな表現がとても素晴らしい。



二行目の末尾なので、あまり大胆な表現で収めたくはない部分だ。ここでも軽やかでリズムカルな筆の流れで表現している。左への小さな張り出しがリズムを感じる見事な表現だ。

本と、き寸い万し来鳴可八
萬代二可堂利つく邊く
於も保ゆる可も

今回の課題は、三行書きの散らし作品になっっている。書き出しが中央近くになっっていることに注目すべきではあるが、行が長いことを考慮して、無理な右への流れを意識しないように心がけたい。縦に続く文字の字配りに注意して、行の流れとは何か、自分で考えながら表現してほしい作品だ。基本的には連綿において、右端から左端に筆を運ぶのではなく少しずつずれながら右への流れを生んでいく自然なリズムで表現したい。奇をてらう事のない、品位の高い表現の作品である。